

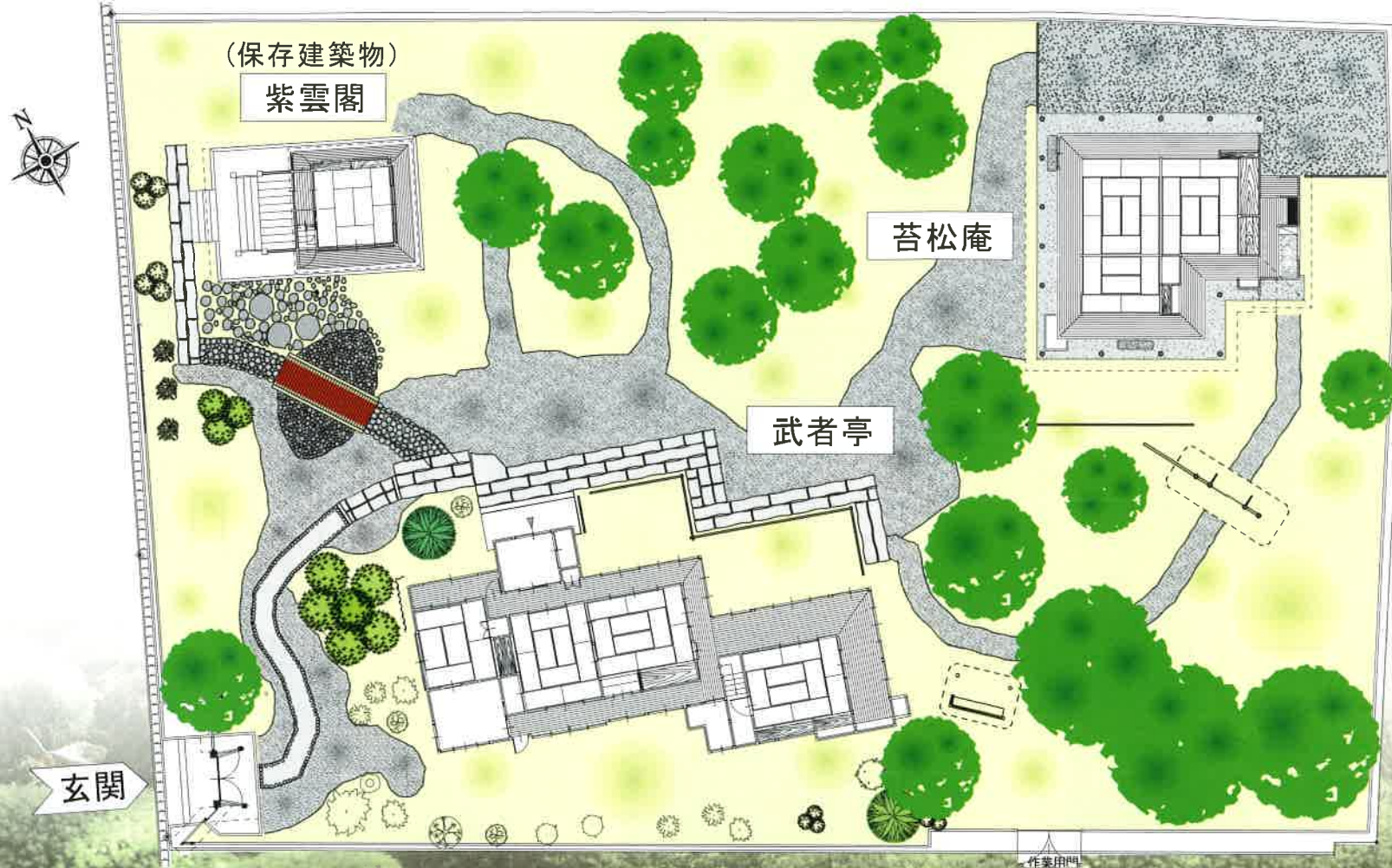
苔香荘

taikoso

かつて、新発田藩の上級武士が住んでいた屋敷の跡地。

その後、明治の中ごろ、呉服商村山家の屋敷となり今日まで、みごとな松の庭園とともに受け継がれてきました。
そこに、旧村山家の大茶室、旧武者家の別荘、

さらに白勢家本家の庭園にあった紫雲閣を移築して生まれたのがこの苔香荘。
城下町新発田の歴史と文化を美しく織り上げた空間です。



武者亭

平屋部分は寄棟造り、後に増築されたとと思われる2階建ての部分は入母屋造りで、それぞれ屋根の形が異なっている。
平屋部分の室内は、床の間書院付きの和室、2階建て部分の1階は折り上げ天井の洋室。折り上げ部と天井は漆喰塗で、大正ロマンを彷彿させる。

紫雲閣

かの銀閣を模した木造2階建ての樓閣建築。屋根は宝形(ほうぎょう)造の瓦葺きで、屋根葺き材や架構、継手や造作などに独特の工夫が見られる。
窓は花頭窓で、1階は書院造りの和室、2階には観音像が安置され、格天井には60枚の天井画が見られる。

苔松庵

寄せ棟造りの瓦葺平屋建て。
四方開放の10畳の和室と6畳の和室の境にある下がり壁には、新発田藩の歴代藩主を務めた溝口家の家紋である「五階菱(ごかいびし)」を思わせる欄間(らんま)がある。
廊下の床板は手造りの鶯張り方式、雨戸は大正ガラスを使っている。

庭園は、三棟の歴史的建造物と調和することを第一に考えられた。

アカマツ、サクラ、モミジなどもともとあった樹木をいかしつつ、新たに苔や砂利などを配すことで庭と建物が、無理なく融け合っている。苔は、天然と人工栽培を組み合わせ、築山ごとの個性を演出するように計画された。

一方、苔松庵の広間から眺められる庭は龍安寺風の石庭。

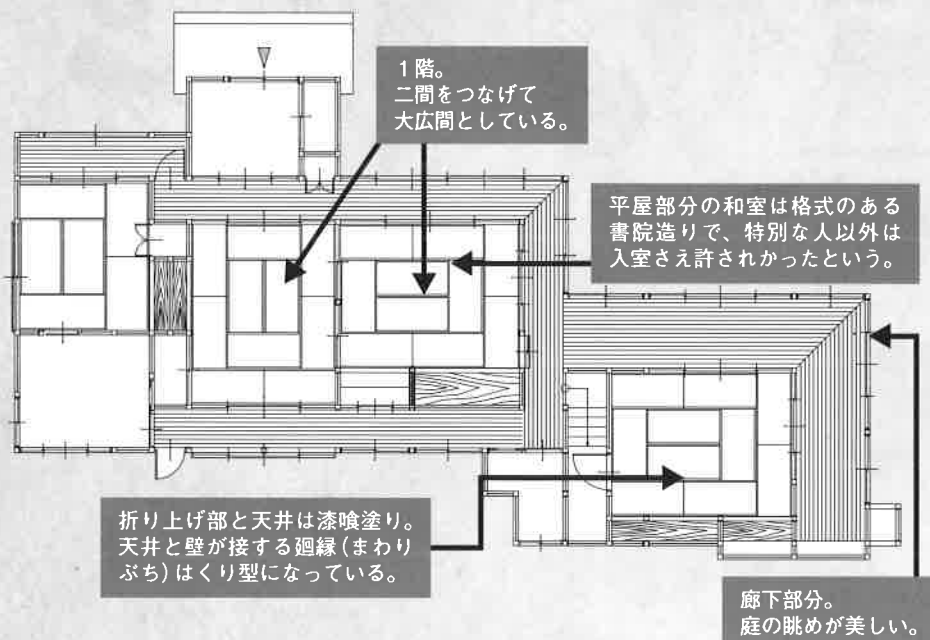
中央には新発田市五十公野地区から出土した名石「古寺石」を置き、周りには加治川ビリ砂利を敷いている。



武者亭

musyatei

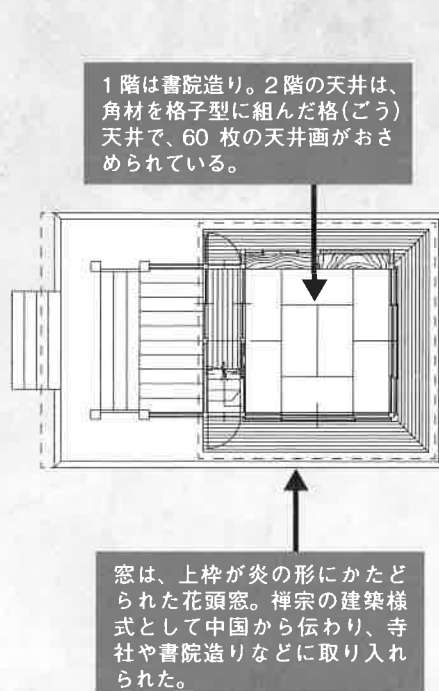
三ノ丸に建っていた武者家の別荘を移築。平屋部分は寄棟造り、後に増築された2階建ての部分は入母屋造りで、屋根の形が異なっている。



紫雲閣

shiunkaku

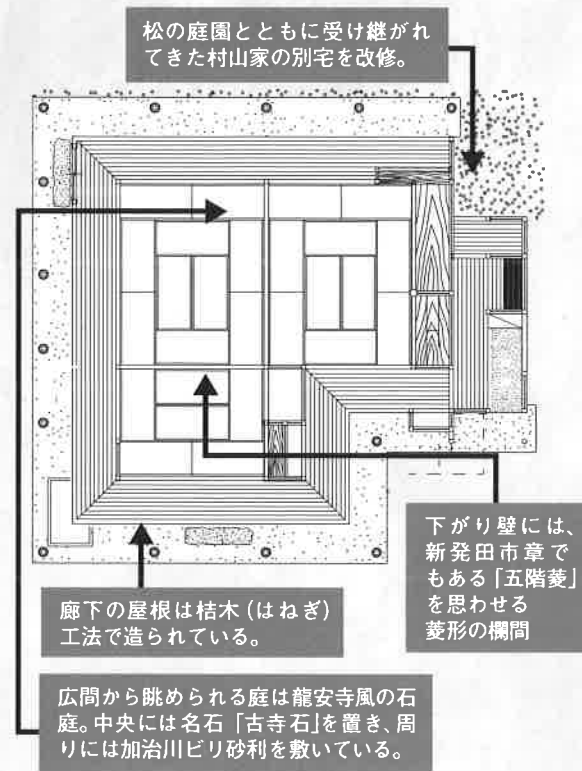
花頭窓が印象的な木造2階建ての楼閣建築。かの銀閣を模したといわれている。屋根は宝形(ほうぎょう)造の瓦葺き。



苔松庵

taisyoan

寄せ棟造りの瓦葺平屋建て。もともこの地にあった建物で、四方開放の和室からは新発田屈指の庭園が眺められる。



武者亭 [歴史]

もともとは、新発田藩をおさめていた溝口家の家老や重臣の屋敷があった三ノ丸に建っていたという。新発田市菅谷の豪族として知られていた武者家の別荘として建てられ、町中の学校に通う子供たちの寄宿舎としても使われていた。2階部分は大正14年に建築。母屋の平屋部分は明治初期から中期にかけてだろうと推測されている。

紫雲閣 [歴史]

明治35年、八代目白勢長衛によって建てられた。その背景には同年におこった大飢饉があったという。白勢家では飢饉の対策として、庭に築山をつくり、小作人が搬入してきた土と同じ量の米を交換し、農民を救った。そして飢饉で亡くなった人たちの供養としてこの紫雲閣をつくり、観音堂を祀った。

苔松庵 [歴史]

明治の頃、「古着屋日本一」ともいわれ、全国的にも有名だった村安商店。その村山家が客人らをもてなすために建てた別宅が現在の苔香荘である。新発田屈指の庭園を備えていて、明治11年、明治天皇が北陸巡幸した際、立ち寄って、休息したとも伝えられている。